シリーズ 城

第七十回

秋月城

～秋月の乱の目撃談～

深草 祐一

秋月城は、現在の福岡県朝倉市の山あいにあり、その城下町は、桜と紅葉が美しい筑前の小京都として観光名所になっています。また、明治の士族反乱のひとつ秋月の乱の舞台としても有名です。実はここ、私の妻のご先祖様ゆかりの地で、義祖父様が書き残された自伝に、秋月藩士だったご先祖様のお話が書いてあります。その一般には知られていないエピソードも交えつつ秋月の歴史を紹介したいと思います。

秋月藩の誕生と秋月城（陣屋）の築城

戦国時代までこの地を領していたのは秋月氏です。古処山城を居城とし、現在秋月の町がある山麓に平時の居館を構えていました。豊臣秀吉の九州征伐の際、秋月氏は島津方に付いて抵抗したことから、降伏は許されたものの先祖伝来の秋月の所領を没収され、日向国高鍋へ移封されました。ちなみに高鍋藩秋月氏は幕末まで存続しており、有名な上杉鷹山は秋月家から上杉家へ養子に入った人物で、秋月藩黒田家から嫁いだ母から生まれています。

関ヶ原の戦いの後、筑前国には52万石余で黒田長政が入り、福岡藩が成立します。そして、黒田長政が死去した時、その遺言により、次男の長興に5万石が分与され、筑前秋月藩が誕生することになりました。秋月藩を立藩することになった黒田長興は、かつて秋月氏の居館があった辺りに城を構築しました。一国一城令により、例えば筑前国に福岡城以外に「城」は建造できないため、江戸時代以降、このような城は「陣屋」と呼ばれます。ただ、秋月黒田家には城主格が与えられていました。既に戦乱の世ではなく、藩庁として必要十分な程度の縄張りで、石垣や門は立派に造られましたが、複雑な防御構造や天守閣などはありません。古処山城の廃材も利用したといわれ、現在に残る「黒門」は、古処山城の搦手門を移築したものと伝わります。その後、黒田長興は、島原の乱にも出陣して戦功を挙げ、長崎警備役も務めています。また、新田開発や交通の整備も行い、以後幕末まで続く秋月藩を確立させました。父長政が見込んだとおり立派な人物であったようです。さて、黒田長興が秋月藩を立藩するにあたり、黒田宗家から家臣が付けられましたが、新たに登用された家臣もいました。その中に、元織田信長の家臣の子孫で由あって浪人の身であった者がいました。仕官に苦労していたところ、黒田長興に児小姓として召し出され、後に150石で御馬廻として召し抱えられました。この人物が私の妻のご先祖になります。土方氏系図によれば、織田信雄に仕えた土方雄久（関ヶ原直前の徳川家康暗殺計画で知られる武将）の弟雄直の孫であり、土方重勝とあります。

明治維新と秋月の乱

幕末、幕府による第二次長州征討が行われ、秋月藩も幕命に従いました。九州小倉口においては小倉藩の小笠原長行が九州諸藩を率いる総督でしたが、関門海峡の航行安全確保を口実とした英国からの圧力もあり優勢な海軍力を活かせず長州軍に上陸を許してしまいます。やがて、肥後細川藩が戦線に加わり、一時は長州軍を圧倒しますが、全体の消極姿勢をみて撤退。ついに小倉城は長州軍の手に落ちました。この時、秋月藩で大筒頭だった当時の土方家当主勝良は、太宰府から小倉城救援に赴き、城から逃れ出た奥方の一行を護衛して肥後まで送り届けたそうです。その褒美として小笠原候から短刀を授かったといい、義祖父様が由来を書き付けられた紙とともに今ここにあります。

さて、明治維新で秋月は福岡県に合併されました。武士は士族ということになりましたが、旧来の扶持や特権を失いました。そして、西郷隆盛が新政府内での対立から薩摩へ下野すると、新政府の政治に対する士族達の不満がいよいよ高まります。そして、佐賀の乱、熊本神風連の乱、秋月の乱、萩の乱、そして西南戦争という一連の士族反乱が起こりました。これらの乱が起こった地に限らず各地の不平士族たちは、互いに連絡を取り合い「決起する時は共に」と示し合わせていました。しかし、佐賀の士族が暴発し、たちまち新

政府に鎮圧されてしまったため、一斉蜂起の機を逸してしまいました。それでも、互いに人を派遣し合い、やがて再び決起の機運が高まっていきます。そして、最有力の鹿児島が動かないことに業を煮やした熊本の神風連が先駆けとならんと決起します。これもたちまち鎮圧されてしまうのですが、その頃、秋月では、磯敦を中心に70～80名が秋月学校に、今村百八郎を中心に150～160名が西福寺と田中天満宮に、それぞれ集合していました。ここで、福岡県のうち秋月を含む第七大区の副区長で秋月出身だった江藤良一が何とかこれを鎮めようと、秋月へ向かう警官隊と鎮台兵を途中で押しとどめつつ、戸長（村長のような当時の役職）たちを集めて、旧高禄者たちが多く集まる秋月学校に赴きました。義祖父様の自伝によれば、この時、戸長だった土方勝良は共に説得にあたったそうです。夜が明けるまで説得を続け、一度は諦めて引き揚げかけたものの、土方は今一度説得しようと一人で戻り、それを気遣った原田種忠も後からついてきて、二人で様々に説得した結果、ようやく一部の者に解散を承知させたそうです。他の書籍によれば、江藤の説得によって60余名が解散したとあります。そして、残った代表の磯敦らが更に今村ら急進派を説得しようと天満宮に赴いたものの、今村らは頑として耳をかさず、空しく帰る道すがら、「やはりこの老骨も壮年者と進退を共にする。」と肚を決め、今村らに合流したといいます。この後、警官隊と共にやってきた穂波という侠客を今村が切ったことで、反乱が決定的となりました。そして、この秋月党は、かねてから共に決起を約していた同志と合流して山口県の萩へ向かい共に東京へ上ろうと、大分県の豊津へ向かいます。しかし、豊津の士族は既に決起しない方向でまとまり小倉の鎮台兵を引き入れていました。鎮台兵に急襲された秋月党の者たちは、辛うじて英彦山中へ逃げ込み、秋月へと退却することになりました。道中、磯敦ら指導者7名は切腹しましたが、今村百八郎ら急進派はあくまで戦い抜こうと、古処山を経て秋月を目指しました。再集合した50～60名の秋月党は、乱鎮圧の本部が置かれていた秋月学校を襲い、副区長の江藤良一らを格闘の末殺害しました。この時、土方勝良は甘木へ行っていて難を逃れたそうですが、妻子は秋月の自宅に残っており、当時5歳だった義祖父様のお母様の談が遺されています。夜に「えいえいおう」というもの凄い鬨の声が聞こえ、お守りに背負われて裏の深い藪の中に隠れて一晩を過ごし、翌日、母に引率されて町の外へ逃れたそうです。町外れのところで屈強な男数名が待ち伏せているのが見え、兄などは慌てて騒いだものの、母は落ち着いて「もしあの人たちが敵意を持っているなら今逃げても無駄だから静かに行きなさい。」と諭して進ませました。するとその男たちは「我々は様子を探りに来た者。安心して通りなさい。」と言ってくれ、逃れ出ることができたそうです。後々、何度もこの時の話をされたといい、震災や大津波にあった際にも実に落ち着いた対処をされていたことが思い出される旨書き遺されています。この後、秋月党は、福岡から派兵されてきた二個中隊に敗れて捕縛され、秋月の乱は終息しました。この動きを受けて、萩においても病床にあった前原一誠が決起しますが、これもたちまち鎮圧されています。その翌年、ついに西郷隆盛が起ち、西南戦争が起こりました。秋月党で捕縛を逃れた2名が加わり、行方知れずとなったと記録されています。

その後の秋月城

秋月は、明治までは元城下町として賑わっていたといいますが、秋月の乱による士族の没落と、主要幹線から離れた立地のために近代化から取り残されていきました。しかし、結果的に城下町の風情が残り、現在、国の重要伝統的建造物群保存地区となっています。城跡だけでなく町割りや水路網、石橋が残り、一部の武家屋敷も保存されています。

山に囲まれた秋月城下町（正面は古処山）

保存された武家屋敷（土方邸はこの並びにあった。裏手は山林になっている。）